

教育研究業績書

2018年05月14日

所属：学校教育センター

資格：教授

氏名：佐藤 幸治

研究分野	研究内容のキーワード
人文科学系・人文系・哲学・哲学、宗教学、倫理学	哲学原論、宗教史、宗教哲学、西洋思想史、宗教思想史
学位	最終学歴
文学修士	京都大学大学院 文学研究科 宗教学専攻 博士課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 修士号（京都大学）	1980年03月	キェルケゴール『哲学的断片』における同時性について
2. 学士号（大阪外国語大学）	1976年03月	ドストエフスキー『白痴』について
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 『生と死の現在（いま）－生命はどこへ向かうのか』	単	2007年03月	晃洋書房	人間の誕生と死の事情が今日では大きく変化している。現在における誕生と死の問題を、生物としての人間という原点に立った視点から考察し、それがいかに生物としての在り方から逸脱しているかを見る（第1章）。今日のさまざまな生殖革命の実態（第2・3章）とさらに臓器移植を前提とする脳死判定の問題（第4・5章）を人間学的・哲学的視点から批判する。そしてこれからの展望についても考える（第6章）。
2. 宗教の根源性と現代 第1巻	共	2001年03月	晃洋書房	杉村・岩田・氣多・神尾・長谷・棚次・松田・北野・中村・松本・荒井・脇坂・宮永・松岡・佐藤・谷口 「第Ⅲ部 癒しと宗教 第五章 不幸と絶望」担当。人間の不幸や絶望を日常のレベルからではなく、宗教的側面から見るとどういう事態であるかを考える。参照した宗教哲学者はカント、キェルケゴール、ヴェイユである。宗教では不幸や絶望を相対化して見るのではなく、絶対的なものとしてみるのであるが、その絶対性の向こうに、不幸や絶望を克服する地平が見えてくることを証明した。担当（pp. 262～278）
3. 道徳－思想と教育の今日的課題	共	1999年09月	八千代出版	佐藤幸治・仲原孝・清水大介・押谷由夫 編者も兼ねる。小学校から高校までの学校現場における道徳教育の混乱に際し、問題を深く広く考え抜くことにより打開への道を探ろうとする意図で編集したもの。内容としては人間そのものへの問いを深めるとともに、今日までの道徳や倫理の歩みを展望し、さらに今回公示された新しい学習指導要領などを資料として加えつつ、その解説も試みた。担当（p. 1～47）
4. 文化としての暦	単	1998年09月	創言社	人間の時間との関わりを暦を手がかりに考える。特に我々が出来事を記憶する場合の暦の数字（例えば、1999年という数値）がどんな根拠で成立しているのか、あるいは、そこに誰のどんな意図が隠されているのかなどを探っていく。そして暦そのものが人

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
5. 未来をひらく道徳教育の研究	共	1998年04月	保育出版社	間の文化として成立するものではあるが、かつまたその暦をめぐって展開される人間のさまざまな文化的営みについても考究した。全 (pp. 243)
6. 日本近代思想を学ぶ人のために	共	1997年07月	世界思想社	中野・押谷・今村・佐藤・岩間・梅木・児美川・小川・原田・原・伴・坂本・河田 今日いろんな方面で脚光を浴びている道徳教育を、これからの人間性の開発を絡めて検証する。筆者の担当は第1章「現代社会の特質と人間形成」の第3節「自己形成の課題」と第4節「これからの社会を生きるための価値観の確立」で、人間の自己としての本質と我々が生きる時代との関連性を追求した。(pp. 27~32)
7. キェルケゴールを学ぶ人のために	共	1996年10月	世界思想社	北野・小泉・藤田・関根・平山・安藤・細谷・谷口・高橋・服部・林・安富・佐藤 日本近代思想史を代表する思想家16人の紹介書。特に西洋思想との対決を主なる視点において、思想家の残した諸作品群からその思想の内容を簡明に明らかにする。筆者の担当は「霊性と即非—鈴木大拙」で日本と東洋の思想を西洋に提示した鈴木大拙の生涯と思想をまとめた。(pp. 245~262)
8. 道徳教育 (教職専門シリーズ6)	共	1993年01月	ミネルヴァ書房	山下・藤野・源・北田・大利・榎田・細谷・川井・築山・大尾・佐藤・山本・川村 キェルケゴール思想の入門的紹介書。筆者の担当は第II部「時間論」の第3章「同時性」で、キェルケゴールの宗教的時間の本質について考察した。キェルケゴールのテキストは主に『哲学的断片』と『キリスト教への修練』である。(pp. 191~206)
9. キェルケゴールと日本の仏教・哲学	共	1992年05月	東方出版	押谷、佐藤、内藤、米山、村山、斉藤、矢口、西村 教職課程を勉強する者への指針として、特に「道徳教育」に関する様々な問題を検討し、多角的に論じたもの。筆者の担当は第2章「道徳教育と人間存在」で、近代の教育観の根底を考察し、近代的世界観の超克を訴えた。(pp. 17-28)
10. 宗教への問い—ホモ・レリギオスとしての人間	単	1990年04月	創言社	大谷、大屋、藤本、山下、川村、佐藤、大峯、東、築山、北野、川井、小田、榊形、クリステンセン、パティリン、ラウリー キェルケゴールが近代日本の代表的な思想家に与えた影響を洞察する。筆者の担当は「キェルケゴールと鈴木禅学—二つの「非」—」と題して、キェルケゴールと日本の仏教哲学者鈴木大拙の思想を近代の克服という視点から比較考察した。(pp. 111-133)
2 学位論文				
3 学術論文				
1. バイオエシックス(bioethics)の諸問題 (5) 癌という病気とその他の問題	単	2005年10月	武庫川女子大学バイオサイエンス研究所年報第9号	人間存在における根本的宗教性について考察した。人間を「反省する存在」と規定し、宗教を「有限性の自覚」とみることによって、両者を「ホモ・レリギオス」として総合する。ホモ・レリギオス(祈る動物=宗教的人間)とは反省する存在が有限性を自覚し、必然的に無限者への眼差しとして宗教を要求する人間のことである。これは全ての人間に共通する特性と思われる。
2. バイオエシックス(bioethics)の諸問題 (4) インフォームド・コンセントの問題	単	2004年10月	武庫川女子大学バイオサイエンス研究所年報第8号	インフォームド・コンセントの問題を受けて、現代日本の死因の第1位を久しく占めている癌という病を巡る諸問題を包括的に論じる。癌の原因について考察した上で、予防対策としての検診の実態や末期医療における告知の問題や議論の多い抗癌剤の問題などをインフォームド・コンセントという視点から主題的に考える。さらに最後にヒトゲノムの解析をはじめ現代目を見はるほどに進展しているバイオテクノロジーを概観し、そこに陥穽はないかを検証しておきたい。扱う対象はゲノム解読の他に特にヒト・クローンの問題にも触れる。
3. バイオエシックス (bioethics) の諸問題 (3) 臓器移植問題	単	2003年10月	武庫川女子大学バイオサイエンス研究所年報第7号	現在の医療界のキーワードの観を呈しているインフォームド・コンセント(納得診療)をパーソン論とパターナリズムの弁証法的統一としてその歴史的背景とともに考察する。とりわけ日本における「三時間待ちの三分診療」「薬漬け・検査漬け・手術漬け」といわれる医療界の現状の分析とその克服の道をさぐる。またその連関として薬害事件にも触れる。 臓器移植は脳死の問題とセットに考えられるべきだ、という視点から、当該の問題を考察した。そもそも人間の死の判定に脳死をもってくるのは正当かどうか、そしてその場合の脳の死とはどのような事態なのか、などを検討した上で、臓器移植の是非を考え

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
4. バイオエシックス(bioethics)の諸問題(2) 安楽死問題	単	2002年10月	武庫川女子大学バイオサイエンス研究所年報第6号	この問題については、欧米はともかく、日本人の間では依然としてさまざまな議論があるので、それも整理した。全 (pp. 12) 人工妊娠中絶問題は新生児安楽死問題にもつながるが、その問題も考慮しつつ、とくに末期患者の安楽死問題を中心に、さらに死に近づいた老人に対する医療の現状と展望を考察する。老化と死という人生最大の問題にさまざまな角度から接近し、その上でSOLとQOLの対立が安楽死に対してどういう立場をとっているかを検証する。また、歴史上の安楽死を巡る議論を自殺の問題と関連させつつ考察を深める。
5. バイオエシックス (bioethics) の諸問題(1) 人工妊娠中絶問題	単	2001年10月	武庫川女子大学 バイオサイエンス研究所年報 第5号	性と死の関係を生命の流れそのものの文脈から明らかにし、それを踏まえた上で、人間の誕生事情を再確認する。そして現代における状況として体外受精技術や遺伝子診断などの問題もあるが、とくにここでは人工妊娠中絶の問題を考察する。そしてそれに対する賛否をSOLとQOLの対立の歴史の中から考える。全 (pp. 11)
6. ケルケゴールの実存人間学—人間学的図式の研究〔Ⅱ〕—	単	1992年11月	福井工業高等専門学校研究紀要	〔Ⅰ〕(同研究紀要第25号)に続き、ケルケゴールの実存人間学の解明。本稿〔Ⅱ〕では人間を「心」と「身体」の総合としての「精神」、「無限」と「有限」の総合としての「具体性」と捉えるケルケゴールの文献を検証した。
7. シュワイツァーのカント理解	単	1992年03月	シュワイツァー研究第20号	現代の偉人シュワイツァー博士の出版点はカント哲学研究であった。シュワイツァーは24才の時に哲学博士論文「カントの宗教哲学—『純粹理性批判』から『単なる理性の限界内における宗教』にいたるまでの—」をしたためた。本稿はこのテキストを読むことで後の人道主義者シュワイツァーの原点を探る。
8. ケルケゴールの実存人間学—人間学的図式の研究〔Ⅰ〕—	単	1991年12月	福井工業高等専門学校研究紀要	ケルケゴールの思想を実存人間学として捉え、その実存理解を全著作を検討することによって把握する。本稿〔Ⅰ〕では人間を「理念性」と「実在性」の総合である「意識」と捉える彼の文献を検証し、この考えを総括的に論じ、彼の宗教哲学全体の理解への一途とした。
9. ケルケゴール著作全集第十巻『愛の業』解説	単	1991年08月	『ケルケゴール著作全集第十巻愛の業』所収論文創言社	翻訳した『愛の業』の成り立ちと、そこに展開されている思想のケルケゴールにおける位置づけを生涯とテキストに即して考察した。特に宗教性Bのキリスト教と倫理的「愛」との関係を中心に検討した。(pp. 591~606)
10. ケルケゴールにおける倫理の問題—カントの倫理思想を省みつつ—	単	1989年05月	宗教哲学研究第6号	ケルケゴールの考える倫理がキリスト教との関連でどのように位置づけられるかを論じた。特にケルケゴールの他者に対する問題を、近代哲学者カントを振り返りつつ、比較検証した。そしてケルケゴールの単独者思想が個人主義的であるとのこれまでの見解を批判、止揚せんとした。
11. ヤスパースとケルケゴール	単	1986年10月	『ヤスパース—その生涯と全仕事』所収論文行路社	J. エルシュの同書翻訳書の付録として、ヤスパースの原書の中からケルケゴールへの言及を選び、ヤスパースが自らの思想に多大な影響を与えたとみなすケルケゴールに関して、なぜ、独立の著作を残さなかったかを考察した。(pp. 211~221)
12. ケルケゴールの自由論—『不安の概念』の考察	単	1986年09月	宗教研究第269号日本宗教学会	人間存在に与る本質的問題といえる自由をケルケゴールに即して考察した。小論は『不安の概念』をテキストとして、ケルケゴールが人間の自由というものをいかに考えていたかを考察した。(pp. 71~93)
13. 認容と殉教—ケルケゴールの宗教哲学・試論	単	1985年11月	ケルケゴール研究第15号 創文社	ケルケゴール思想の最終的な結論、即ち、彼が生涯にわたって本質的に伝え要求したことは何かを考察した。それはキリスト教における殉教の思想ではないかと問題提議し、そのことと、許しとしての「認容」の問題との連関を検討した (pp. 29~40)
14. 生成の課題—ケルケゴールの「瞬間」論	単	1981年09月	ケルケゴール研究第11号 創文社	ケルケゴールの実存生成、即ち、真実の自己への生成運動を実存の時間性という視点から分析した。その真実の自己は、ケルケゴールにおいては、キリスト教信仰において実現される以上、本論はケルケゴールの理解するキリスト教的時間論の解明ともなる。(pp. 20~31)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. ケルケゴールのカントへの関係	単	1989年09月	日本宗教学会	ケルケゴールのカントに対する関係は両義的であった。即ち、カントの道徳思想には同感を抱きながらも、人間の宗教性に関するカントの理解には問題

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
2. キェルケゴールに於ける単者の殉教と愛	単	1985年09月	日本宗教学会	点をみた。その点をテキストに従って解明した。 キェルケゴールの思想の中心は単者であるが、その単者にとって他者はどう考えられたのか。キェルケゴールは他者の問題を看過したという解釈を批判し、彼は終始他者との関係の重要性を強調していたことを解明した。
3. キェルケゴールの人間学的神学	単	1983年10月	日本宗教学会	キェルケゴールの宗教哲学が人間の自覚という自己関係の方向から、信仰という神関係の道が開けることにおいて成り立っていることを論じ、その意味で人間学的神学といえることを明らかにしようとした。
4. キェルケゴールに於ける真理と伝知の問題	単	1982年09月	日本宗教学会	キェルケゴールにおける真理概念は「客観的真理」ではなく、「主体的真理」であり、その真理の伝達方法は直接的ではなく、間接的であることを、特に『哲学的断片への非学問的後書』をテキストに論じた。
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			
	日本宗教学会 日本道徳教育学会 京都宗教哲学学会			